

い、妾不憫と思召しはり、此後幾久しく御榮え遊され、天晴君様の御名を、天が下に御輝し遊されしはり、
高尾が夫よ良人よと、草葉の蔭にて人々の吹聴いたし參らせ、夫をのみ樂しみに致し參らせべく
最期の輪回も未練に恐ろしくはしへ共、鬢の毛一房、汚穢つゝ參せしはり共小袖一重、御筐にもと進じり、
志津三郎の亂れ焼、焼刀も消え鏡も曇りはべけれど、妾が赤心はこれに籠り參らせしはり、血汐の儘にて御
守りと遊し下されべく、早々冥土よりの迎ひ切りにしはり、御殘り惜しくはしへ共、これにて御名残を止
め参らせし。



徳田秋獻

叢かうじ

(二)

東京近邊とのみにて村の名は逸したり、又の名を穢多村といふは、往昔より人間交際出来ざりし穢多の部落な
ればなるべし。革細工の出る處にて、牛馬犬猫貉狸な等の革を剥ぎて太鼓を張り革櫃を作り、近來は又靴と

いふもの、需要益殖えのくため、人の外に置れし穢多も、新平民の稱呼と共に世の中に押出し、大分の資産
作りて蒼白かりし人の顔、遠かに色めきわたり、家も新たに築き、田地も買ひ、學校も開けて、樹立の際より立
昇る煙、昔のやうに穢多臭からぬも心からにや。
中にも三里南の〇〇町に移住せる輩頗る多し、此も亦其の一なるべし、一月以前の事なり、半歐半和の嚴し
き玄關構への邸宅町の端に起されたるが、玄關の正面には枝振をかしさ雄松を根土堆く植え樹蔭より木理
麗はしき杉戸微見ゆるやうに作りなし、門の左方には愛人醫院と書したる新らしさ札を掲げ、右方には陶器製
にて醫士赤木默齋といふを打付けたり。まだ一月半餘を過したるばかりなれば、藥局の書生は匙音さすると
稀に、下駄は五六足美はしさを駒べたれど、彼は皆家族のを取出したるなりと減らず口を利くものもありとぞ。
穢多とは思はれぬほど、色白の身材高き紳士なり。肥肉づきて頬髯さへ疎ならず、薺色の瞳子を有てる
眼は少し大き過ぎて、裏のに背て恐ろしく、頑然と下りし大なる耳朶の下に空豆程の赤筋ありて汚穢ろしく、
彼が追難う穢多の血脉を引たる章と、頑固なる老爺の惡口を聽きて、簡易學校に通ふ惡童が嘲罵の種子となる
けに世を針の穴の狭く見て、世間の廣さを知らず、一概に頑陋と評し去らるべきにあらねど、主張の強過ぐる
を、例の怖き目を剝出して睨まへて通れど、口惜しきとの究みなるべし。眼に少しばかりの文字はありて、醫
術はた拙からず、從つて小理窟いふに長け、自惚も淺からず、動もすれば律義心に怒る種類の人なるが、穢多だ
けに世を針の穴の狭く見て、世間の廣さを知らず、一概に頑陋と評し去らるべきにあらねど、主張の強過ぐる
にして獲たりしにや、穢多ならぬ清淨無垢の血脉を受得たる婦人にて、天地に唯一人頼みとせし夫を喪ひて
は此の紳士の缺點なるべし。去年の秋落葉劇しく窓を敲さて凄じかりし或日の夕、妻は冥府に啓行して仕舞ひ
けるより、介抱人と名のつく三十前後の左までは賤しからず醜からず、氣の利たる女を傭入れしが、此は那様
寄邊なきまゝに、萬事は天運なりと合點し、穢多なるとを識らぬ爲して入來れるなりとか。名をお横といひて

何事にも思遣り深く、物のいひ様、身のこなし、優しく過ぐる程なれど、鼻筋鋭く通りて、時に額に青筋を露はすは、何處かに強さどころのある女性なるべし。默齋は萬事冷たく暮して、黃金を貯うる性質にて、銀行に仕舞ひある金、千宛數へて幾個か有ぢたれど、今に薬價は如何なる貧民にも呵責しても嚴重に取立て、世間體丈は飾れど、お横には未だ半襟一筋灑洒したるを奢らず、書生に温き飯喰はしたる例なしとぞ。

默齋に過ぎたるもの一個あり、今年十六のお禮と呼べる娘にて、穢多と思へば何處かに淋しきところあるやうなれど、素性を知らぬ男子は、人ひとと雖も其の醜容に恍惚るゝならむ。普通學は畢りて、今や茶湯、裁縫、琴の修業に餘念なく、頭に挿す簪さへ普通のものは用ゐさせず、此の娘標致は十二人並なれど、此方に穢多といふ弱點あれば、百歩を譲りて幾許かの持參金を附くべき間、女房に貰手あらば周旋して給はるべし。赤木の家を嗣かむといふ人あらば、家藏田地一切の資産は只今にても譲りても露惜しからずと、其れとはなく知人の際に披露したるも、子故の親心なるべし。

常々、介抱女のお横は、半は追従もあるべけれど、半はまたお禮の不憫さも取交せて、お禮さんのやうに標致はよし、何も彼もお出來なさると申すんですから、世間の人が決して空手では置きませんよ、必然好いお養子が被入しやるに相違ございません、お氣遣ひ遊ばしますなど、口を縮めて朝夕默齋を煩つれば、嬉れしさに微笑まれながらも他には明されぬ素性の弱點あれば、後は苦笑に紛らしながら、尙必然左様いふ都合にの答の待たる。

一日お横は愈々口を開きて、左様に苦思／＼なさらすとも、工夫はありさうなものぢやございませんか、夫とも外に差障りでもといふに、否々、差障りとては微塵もなけれど、とかく縁は長し短し、彼方が宜ければ、此方の間尺に合はず、思ふやうにはなり兼ねるものだと鬱ぐ。斯うなすつては如何です、裁縫のお師匠さんはお前からと、愈々大事はお横がものとはなりけり。

お禮は陰氣といふべき方にて顔の美しさ、丈、身の素性を恥づると深く、衆人の間に交はるは、何より辛苦ことのみ思過せしが、交際ひてみれば、人は案外無情さものにはあらず、彼の標致で穢多といはするが氣毒なりと、口輕に勧むれば、ム、成程、此はまた婦人に限る、好いところへ氣がついた、では御苦勞だが好いやうにお前からと、愈々大事はお横がものとはなりけり。

話好きとやら、ツイ先月のうち二人もお弟子の片付いたのは、皆なお師匠さんのお口が掛つたからだと申すぢやございませんか、何うか貴方も左様なすては如何です、何なら妾が好いやうにお頼み申して参りませうかと口軽に勧むれば、ム、成程、此はまた婦人に限る、好いところへ氣がついた、では御苦勞だが好いやうにお前からと、愈々大事はお横がものとはなりけり。

お禮は陰氣といふべき方にて顔の美しさ、丈、身の素性を恥づると深く、衆人の間に交はるは、何より辛苦ことのみ思過せしが、交際ひてみれば、人は案外無情さものにはあらず、彼の標致で穢多といはするが氣毒なりと、口軽に勧むれば、ム、成程、此はまた婦人に限る、好いところへ氣がついた、では御苦勞だが好いやうにお前からと、愈々大事はお横がものとはなりけり。

然るに異しき事は出来れり。お横は默齋を唆かしで裁縫の師匠への贈物を美々しく持へ、お禮が縁談に就き、細かに依頼するところありしが、如何にしたりけむ、其の翌日より、お禮は又思案に沈む病を起し、裁縫も厭なり、茶湯、琴も厭なりとて、食事さへ慵く、何事をか患へはじめたる、哀れに萎れけり。

默齋は狼狽て、脈を取り、舌を檢め、呼吸を測り、瞳子を覗れど、内に秘めたる憂の外に現はれたる驗となるが心の開けたるもお横が丹精に依れりと稱へける。

べきものはわらず、病氣かと問へば頭を掉り、病氣ではないのかと問へば黙して暗涙に眼を曇ませて了ふ。何うしたのかと追れば、五月蠅いとて、奇麗なる眼を爛々させて目眦に劇しき痉挛の電凄まじく、何故左様に鬪いでくれる、腹の立つと心配事、何によらず俺に打明けて氣を安めて呉れと優しく問へば、知りませんよと振袖を投り出すに、默齋はとくに困じ果て、これは是非お横に限ると頼みける。

折しも雨は霏々として細糸を亂せるに彷彿たる日なり、更衣するに寒く、せざるに熱き初夏の鬱陶しさ、定めしお六づかり給ふは此のお天氣の故でございませうと、仔細顔に顎をしお横は、大分機嫌が悪い俺は今餘程肱鐵鉗を喰はされて來た、往て見てはくれぬかと、默齋の頭を搔くに、去らばと身を起しぬ。

(二)

此間のとなりしが、花見にて父上の強つて誘ひ給ふに伴はれ往きしが、彼の痣を見覺えたる子供連の背後より蹤来り、五月蠅いと前に廻はり後に追れ、左右に取纏はり、彼が穢多だとよ、彼が新平民の敷醫などよ、ぢやあ彼が瘧疾な、道理で蒼白な顔をしてゐやあがる、ヤイヽ彼に向いたぞ、睨まへたつて怖くはないぞ、立停まつたな、此方まで來られるなら来て見あがれ、貴様のやうな不具に診察は頼まないぞ、何だと大きな聲で此處まで來て言やがれ、ワーィヽと、後は呐喊を作つて無暗なる舉動、礫を取りて投るやら、棒を大地に打ちくるやら、氣が氣にあらず、父上を促してさつさと往けば、父上は妾が手を握詰め給ふて、互の脂掌裡に冷かなりき。

一人にて歩行けば、左迄は人に罵られもせざる身ながら、向血脉の程も恥しくて、閉籠りてのみ暮せしが、女子は又別様の氣心あり、茶湯、裁縫の朋輩は人並に交際ひ給ひしを、心優しき友達は、共に嬉しき面容にて、先生を尙面眩くて席に堪えざる心地しぬ。

歸路にて圖らず其の人々と路を同うして打詰ひしが、貴嬢はお嫁に被入しやるんですつてね、左様ですかは優しかりしが、否と返へすれば、眼を圓くして銷魂たる面容可笑しく、もう決つたつてね、左様ですか、と問はれ、黙つて差俯けば後邊からお芽出度と冷評す。御標致か好いから何うしても口が早く掛りますのさ、とはしたくなきとも齒に衣着せぬは、裏町の左官屋の娘なるべし。次第に乘地になりてした、かに戯弄ひし果て、誰の口からかは覚えねど、穢多ていものは標致か美しいものだつてね、と聞きては最早眼も眩ひやうなりぬ。

斯る事を考へはじめては、お禮か處女心の到底衆人を嫌ふとを禁じ得ざりき。しくゝ泣き、しみぐ悲ひで、果ては我を産みし父を恨み母をも怨む氣になりても見たりしが、穢多なれば矢張穢多同士の穢多交際か心易かるべきに、何の業因にか、斯る大町の真中に際立ちて美々しき家を構へ、着物の好み、帶の説へ、言へば更なり、櫛笄下駄に至るまで綺羅美やかなるを選りに選りて、嫌と頭を掉るに、強て殆んど毎日浴湯、日々の髪結、紅塗れの白粉着けのと、父上の待遇給へば、給ふはと人目には憎く、思はれもすべし、產付たる我が村に古くとも中國の式臺少し腐りて虫喰みたる、庭に赤躑躅、燃ゆるばかり美事に咲きたる、彼の母上の病沒り給ひたる家こそ住みよけれ。もう厭なり、斯る辛きことは復とあるべきや、贈物など先生の此はと驚き給ふ程爲給ふは、妻か身可愛しとの慈悲なるべけれど、慈悲の却りて身の仇とは今思當りぬ。人は何と言ふとも、出

世など希望にはあらず、人に後指さるゝは針の蓮に坐るより尙心苦しと、お禮は獨り思定めぬ。又お鬱さの御持病ですか、何様なさいました、裁縫もお茶湯もお嫌な時はお嫌で宜いではございませんか、氣散じなとして遊ばふぢやありませんか、其とも何ぞお腹の立つとでもお有りなさるのですか、何が悲しいのですねお母さんとの事でも又思出したんでせう、ね、とお横は優やかに側に座を占めて熟々お禮の俯伏せる面を覗込みしが、露の玉は白さく頬を轉びて、一滴二滴は膝にもほろりと散りぬ。

此のお室は五疊しか敷けない、天井の低い、窓の北に向いた、而して見付か黒塀の、樹共といふては枯萎れた南天の一株許、誰だつて氣は鬱いて了ひます、お氣の詰るのは當然でござります、彼方のお座敷へ被入いな、さあへ往きませう、而して悠々譯もお聞さ申しませう、何ね、譯といつては別に無いのでせうけれど、お聞かせ申すとかありますからさ、例の錦繪でも見せて戴かうぢやありませんか、お嫌なの、と力を籠むれば、お禮は力なげに首うな垂れ、酷くいへば、何うが放擲つて置て下さい、氣隨のものですから、此處の方が居ようござります、も素氣なし。

頃日赤木が家には一箇の波瀾起りぬ。

默齋は樺本といへる一人の書生を有てるが、頃日また横井鎮雄といへる書生を薬局に入れぬ、今年十六歳になりますが、父も母もあらず、意地悪き叔父一人有ちて、天涯に身を倚すべき木蔭もあらず、醫書は幼少なる折より天賦の嗜好なれば少しは讀みたり、據るなき事情わりて產れし村を這れつ。雷名を聞きて來りしとの無邪氣なる挨拶に少しく鈍魯なる性質なるに似たれど、雷名といふに、善き默齋は心を穢はれて、去らばと留め置さける。

一日薬局の隅に新聞紙を繰廣げて意なき眼を彼方此方と巡らせつゝ読みありしが、折ふし樺本は代診とて不

在なり、時計の音のみ室の寂寥を破り、耳を遮るものもあらず、不圖眼を瞬つれば、薬局室の戸口に片手を凭掛けて半身を現はし、氣色至て沈みたる令嬢の大理石像かと想はるゝまで、瞳子を据えて、わかつ顔を凝視め居りしに、ハツと思ひて心轉動する機會、新聞は手先に無茶苦茶に揉まれ了んぬ、慌て、姿を隠す禮が後には、麝香の匂のみ馥郁として薰りける。

ある雨のしよば降りて室のうち薄闇く、鶏の聲向ふの米屋より眠氣に漏れ來りて、無聊に堪えぬ日、腕押し、坐角力、脚相撲など、二人の書生は始めたりしが、次第に乘地になりて、前後を辨へず、劇しき音させて、棚の薬瓶一時に落雷の如く墜ちしが、喧しかりし音收まりて寂として聲なきと少焉、軽て爭論のブツくは低く起りしと思ふ間に、罵り合ふ聲高く響き、遂には起て組付噛付かむまでの勢なりし。默齋歸りて後、二人は恭しく前にのきて、薬瓶數多壊して、花甌したゝかに汚せし由、樺本は喋々しく、罪と大方は横井に被するを、左までには口の利けぬ鎮雄の、血汐のみ面に衝上りて胸は言甲斐なく塞り、黙して首を垂る、氣弱さに、妾がちやんと見て居ました、棚に體を投付け給ひしは確かに横井さんではなかつたらしと、事實を告づられては、些細なるとながら、稚ら心には嬉しかりき。

或時は又、出診依頼に來りし人の姓氏を、記憶好からぬ横井の忘れて、先生の小言喧しからむとする刹那、お禮は能く覺えて、其は妾が取次ぎましたと引取りくるゝは優しさ心の内ぞかし。着物の綻び和鉗の墜ちたるな翠帳の奥深く閉籠り給ふ令嬢が眼に、奇しくも止りて、人しれず懲懃なる待遇數々なりき。寶石入の指環一個、これあげませうといひたることもありしが、此計りは如何に強ひられればとて、氣の弱さ鎮雄には氣は進まず、斯様な野暮なる書生に、貴嬢めきたる此品を有ちたらば、他是泥棒とや疑はひ、折々は代診にも往くな樺本にお遣りなされたら悦びませうといへば、厭なこと、是非お厭なら、此は取ておきのにしませうと舊の

手函の底に秘めたりし。

横井が心は初東風に吹かるゝ、春の若草の如く、いひしらぬ温氣に光被せられて、賤しき此世と、果敢なき我とを三千里外に放擲して、獨り花の香匂ふ樂園の裡に醉へるが如き心地しね。

或夜桜本は何處にてか酒を被りたる、横井を捉えて、貴様は頃日何うかしてゐるのだらう、怪しからぬ姿が僕の爛眼に看破されるとはお氣がつかれないのか、迂闊な奴だ、一體貴様は百姓だといふではないか、土堀の身にてありながら、分を忘れて刀主社會なんぞ氣が利過ぎてゐはしないか、生意氣だなあ、柔弱な奴めがど罵られ、繙ける書に眼は注きながらも、満身の冷汗を浴せかけられたらむか如く、わくする胸の動悸鎮むるに力なく、耳熱く灼りて何とも詐術を知らざりき。

脆く折れ易き性質なれど、乘地になれば、駢馬の勒を放れし如く、桜本は意地になりて尙も激しく、こら横井返事をしないか、辨解は出來ないだらうね、道理だけれど宜くないよ、無闇に優して媚を呈するではないか、お

禮さんに貴様何うかしてゐるだらう、骨のない男だな、白痴奴と、憎らしく言かけ、右手を差伸して横井が細頸を

掴み、左右に搖り動さんとするを、忍び兼ねてや、弱きもの、強くなりて几上にありし小刀を攫ひや否や、敏

捷く後邊に振廻はして、思斷りて横井が腕を下より刺せば、亂暴だなど、顔真蒼になりし敵手の、瞳と後邊に僵

れて、突かれたる處を舐れば、鮮血混々として、傷口定かに見分け難かりき。

其の翌日、横井は一封の遺書を黙齋に留めて、桜本に激されしか、柔弱なりしか、はた正直にして、此の辱に堪え得ざりしか、横井は飄然赤木か家を退さぬ。

嬌羞といふとは、一般人より幾倍も勝りて有てるお禮の、表に微現くまで同情を表して劬はり遣り、同情を表せられたる心算なりしに、こもまた自家獨斷の自惚よりにて、指環を請取らざりしも、内々は誰かに我家の血

は日に添はりゆくのみなり。

頃日裁縫の師匠室田に、夏の初めより頼みおきたる縁談成熟の期來りしにや、好きな人ありと言越しぬ、二三度

室田も來りて黙齋も往きもしつゝ、交渉頻繁なりしがお禮へは何とも沙汰せず、お横は相變らず如才なくお禮

を賺し、黙齋はお禮の病氣に馴れては左迄心を痛めず、藥局の桜本は依然として、無愛相なる素振にて終日匙

を動かし居り、横井か立闘に貼りたりし來診往診時間規定のみは、今尚墨痕潤いる色を留めたれど、其人は如何

にかしたりけむ、其後は赤木か冷飯喰ひて、桜木と喧嘩するやうなる好奇漢も飛込まざりき。

殆んど癖になりしお横が琴でも拜聽しやうぢやありませんかは、五月蠅さほも繰返へされ、折々は素性を詰問

するらさし口調も、狎れては交りはじめて、此には如何にしても厭なる顔みするが心苦しく、宜き程に挨拶す

れば、果はお母さんは何様なお面の、何様なお氣質のお方なりし、定めし縹致よきがうへに、優しき内氣なる、

丁度貴嬢のやうなるお人にや在したらむ、お病氣は何なりし、お年はお幾歳なりし、今度のお墓参りには是非

妻も連れて戴きたうござりまする、も耳に瘤の出来るはと聞されし。

父は或日の夕暮の聲辛々收まりて、擔に吊せし、風鈴戦ぐ風に鳴騒ぎ、十四日の紅葉月、團々として大きく、木解の右手より顔差出し、縁の先なる吳竹の影婆娑として影を伊豫簾に投ぐる頃なりき、お横が氣を利したる手料理に、好きな酒膳の間に、禮も一口呑まぬか、氣の結はる、折々しは、酒こそ百藥の長なれ、さあ猪口を持て、横酌を頼む、厭だといふのか、厭なら好いわ、俺か飲まう、飲めは宜いのにと、獨りほくく笑壺に入り、幾杯をか重ねて雙の耳熱するとき、虹の如き息を吐きて、時に芽出度いとがあるのだが、聞いてくれと、又一杯は

飲乾しぬ。

お前も、もう十六になつたな何だと知れどこと、だから好い養子をと思つて内々は探してゐたが、堪忍してくれ、何うも好いのはないもので、人並に交際か出来る方なら、と滑りてお楨の顔を眺め、母でも存世の折ならば苦勞はないが、是ばかりは金の力にも及び兼ねるので、つい今になつた。薄々は聞いたでもあらうが、お師匠さんのお斡旋で、辛々のと何うか人並の婿が來てくれるやうな都合になつたが、其は銀行の役員で年は二十五、寫眞も取つてある、性質も室田さんの保證だから、間違はなからう、楨、寫眞を出して見せてくれ、勿論異論はないだらう、否だと、何ういふ譯だな、否だ、差ししいのだらう、寫眞なんぞ見なくとも宜しい、何うして、嫌だから嫌だと、左様に剛情には何時何様してなつたのだなあ、お前の勝手ばかりぢやない、親を大切と思つてくれれるなら、誰しも亭主を有つのは世間の法則ではないか、其でも嫌だといふのか、左様なとは聽きたくない、是は御機嫌を損ねたか、と默齋は沮喪返りぬ。

(三)

最初は唯の傭人の如く、着物の洗濯から室内的掃除、厨房の取扱き、又はお禮が身廻りの心づけ、眞實やかに立

働き、高笑ひの聲苟くも吻頭より洩れしとなく、髪も身粧も左までには奥様めいて取締はざりしが、默齋か心を得てしより、次第に傭女の氣は棄て、使はれもの、側から退き、種々内幕に打込みて、家事向きの經濟、近くは又縁談の參謀、元來性鈍ならぬ方なれば、言ふとなすと默齋の心を動かし、亡くなりし妻の鏡臺も出して使はぬか、笄も衣裳も彼様しておけば、お禮が年つきての後、物の用にも立つもあるべけれど、流行疲れゆくと迅速なる世の中なれば、蛆の喰はぬうち取出して着るべし、第一母親の氣になりて娘の事を頼むとありければ、差出がましき性ならずとも、女性は其を嬉しくて、我知らず威權といふものに乗るやうなりゆけば、自然に遺過す程のとも取扱きて、赤木が家の主人のやうになりぬ。

黙齋も娘がことを思ふに切なれば、母のやうにするお楨の妻君めくを憂しとも思はず、且は何事にか感じむ、怨氣は次第に消失せて、志老いゆけば、彼は彼様するではない、俺は斯う考へるの、我も無くなりて領くとを樂みける。

資財はお前に三分一を譲與るべし、お禮に然るべき養子を取らば、俺は隠居して人の脈は診ぬ氣なれば、背後の空地に小瀟洒とした別隱居所を造りて、一人は其に引移るべく、萬事は若夫婦に世話を頼み、念佛でも申して、氣樂に暮すことにしよう、俺が死なら、若夫婦の後見がてら墓参を頼むと少し風邪の氣味にて咽喉に痰を塞らせける時、脆きことをいひける。

此の綠談私か必然結びで見せませう、と疳瘍強き女とて眞實の娘を世話する氣になれば、躍起となりて工夫は凝せしが、お禮が嫌だくには詮術もなかりける。

一週間ばかり前より、身長の高き學生らしき男、脚氣の氣味なりとて毎朝九時を定刻として通ひけるが、何時しか樺本と懇意になり始めて、モルセネの分量は何程、魔睡剤は妙だの、此處に美髯の嚴しからむ薬を調合し

て、呉れ給への、肥肉の逞しからひ方劑はなきかなび、戯談を試ひる中とはなりけるが、高き笑聲嬾んに起りて、談興酣なる或日の朝、此處の娘は何うしたえ、美人だ相だねと戯れられては、口輕なる樺本は得意になりて、説きはじめ、遂に横井がお禮を懸ひしといふとまで興を添えて咄しける。

耳聴きお横のこれを物蔭より聽取りて、鬼の首を獲たらむやうに悦びしが、事實を慥めむとて彼の男の歸るを待ちて突然樺本の側に寄り、今のお話は事實でござりますかと詰りぬ。彼は實際ですよ、必然夫婦になるといつたてのは勿論形容で僞だが、横井は正直なつたから、此様な馬鹿町寧な手紙まで書いてお禮さんに與る心算であつたのでせう、白痴な奴もあつたものだ、と手紙を抽出より取出して投出しける。

愛し給ふかの眞心を捧ぐたの初心らしきとを駢べけるが、此の手紙を何うしてと問へば、其は無論僕が机の中から奪取たので、彼奴の出たのも、多分は斯んあとの露見を懼れてなるべし、彼の夜は徹夜寢なかつた容子で、僕が寝たとおもふ時分に、其處等邊を狂氣の様になつて探してゐたが、到頭眼の覺めぬうち、遂雷して丁ひました、と大口開いて咲笑するが此の男の癖あり。そしてお禮さんの方ではと問へば其は疑問だ、僕は存知ません、と眞面目なり。

お横は其夜黙齋を捉えて此終話を話し、何うも油斷がなりませぬ、お禮さんの方では何うだか知らないが、何にしろ優しい性分で、彼様な剛情では何とも妾は言兼ねます、貴郎のお考へはといたが、黙齋頭を搔きて恐入りたる様なり。

説得の方法ありと、お横は遠廻しに横井のことを微めかし、もし彼のやうなる青年を養子にしたらば、異論はないのでせうねと問へば、案外なりき、シクく泣出して頭を左右に掉りぬ。

半は心を探り、半は嫌りて見、戯弄ひて見る氣にお横はなりて、澁とく駢々を捏ねられては憎さげなる素振母は、

親がないとてお父様の餘り愛に溺れしめ給へば、最はや人並の辨別もあるべき歳なるに、優しき心性と初は思ひたりしが、此頃の執拗は打て變りし表と裏、少しく懲るすんば、第一當人の身のため良かるまじく、娘とおもひて心を焦す世話も仇にのみせられては母たるもの威なきに似たりと、お禮は屹となりて、泣いてゐては判らぬではありませんか、横井か斯んな手紙を書いてた相ですが、心當りはないのでせうか、可哀相に樺本さんに嫌られて、此處を出だのを何とか推諒がありさうなものぢやありませんか、なぞ陰に心を引いて見たりしが、彌々泣崩れて身をブルくと打顛はしな。彼のとを思ふてでもなくば、何故に這度の縁談はお厭でムリます、餘り意地が過ぎますと、草葉の陰のお母さんの胸が、其の度毎に針一本づゝ刺さるゝやうに痛みます、成佛するとも何うすることもならず、魂魄宇宙に逍遙ふて、此の姿までを酷いと恨み給はひが、心苦しうござります、少許はお厭でも愚母のともお考へなすつたつて宜いちやございませんか、と果は女心の狭く、胸の中しどろに亂れて嘆してもみつ。されどお禮か執拗は日に添はりゆくのみなり。

或時は又、ありし時昔、われに慈悲淺からざりし母を憶出しては、暗涙の慘然として頬に冷たきを覚えず、私かに寫真取出で、懷しげに抱きて見、懷に入れて肌に押當てゝも見つ。しみぐ其面を眺入りて、花の如き唇に幾度となく接吻しては座邊を憚り、樹立の中の、此よりは嚴しからねど、樹とも草とも春は春、夏は夏、秋冬それくのをかしさ眺望、後の庭に小さな池わりて鯉飼のわかな影に畏れぬまでになりしと、小さき窓にかけたりしかなりやの可愛かりしと、取次に昔の面影の忍ばれ、哀愁の情、種々に聯なり起りて小さき胸を掠めて至り、寫真を頬に押あてゝ、涙の湧出づるに任せ、領伏せば、後邊に何時しかお横の立居りて、此もまた亡き母を左まで戀慕ふ心から我を疏むするならむとの僻心を起さする原とはなりけむ、お禮を憎しとおもはねど、可愛しともおもはずなりぬ。

穢多の着古し、左まで有難しとも思はねど、仰のまゝに縫直して着たるも多し、其度毎にお禮は眼を涙に曇らせて、われを怨むやうなる面容、多分は大切のく母上の片身、他に着らるゝが忌はしく、われを潜上なる婦人と輕蔑むでならむ、婦人ならば、父上に先ちて此は似合ひませう、縫直してあげませう、お召しなすつては如何位はいふてくれても身の品格を墜す種にもなるまじ、穢多の血脉にてありながら、汚れ一一點なき妾を何處まで賤まひとならば、妾にも仕方ありとお横は思ひ僻ひやうなりぬ。

多くは進まぬ酒なり、唯の猪口に一杯か二杯、父上の歓手がてら侑め給ふに辞み難く、僅かに微醉機嫌となりて、眼臉耳朶櫻色になるまでの快樂、用は其かため缺くといふにあらず、居住の崩るゝにもあらず、齒を剝出してグロ／＼笑ひ、大聲にて喋々る癖ありといふにもあらぬを、飲む毎、私と妾が顔を睨めて、いかにも不得心らしく燃つた顔容、お禮さん一つ如何と差せば、眉を顰めて顔を背向けて仕舞ふ。先月の中頃なりしが、お墓参の折はと盟ひおきしを、妾を出抜き給ひしは、佛に對して併れては濟まぬとの魂情ありしなるべし、亡き母上のことをは此後は欠伸にも出すとにあらずと彌々心は暗うなりゆくのみなり。

遂には、お禮さん、ござります、なさいましの綺麗なりし詞なりしか次第に粗暴になりて、折々はお禮と呼棄にして見たり、禮やと母めかして見たり、斯うお爲、彼様お爲、左様ぢわないよ、鈍な娘だねの小言も、黙齋の姿見えぬをりは、唇を滑りて轉げ出易く、可愛らしき口元、綺麗に結ひし髪、何も彼も瘡の種子となりて、胸に激する怒の焰消ゆる時なく、また最初のお横にてはあらずなりぬ。

何とは理由は判からぬぞ、彼程までに劬はり給はりし母上の今は全然妾を無きものにしての取捌き過るなきに叱り罵り、咎もなきに罪を被せ、斯様に鬱ぐのは四百四病の難物浮氣な戀からだの、横井は何うしましたらうだの、折々はまた穢多とは直接に言はねど、其となく妾が血脉の世の常ならぬを嘲り、お父さんの痣は彼はどうぞは、袖を拂ひて逃げむかとも思ふなり。

何、初は氣味か悪くて怖かつたが今ではもう何とも思はないのよ、彼様な痣は生來のかえ、腐りはしないだらうかね、妾の知人に天刑病患者があつたが、顔の色が白くて、唇が薄ツベラで、眉毛が描いたやうに奇麗で、肌理といつたら大理石見たやうな、それはく／＼お禮さんのやうな美形だつたが、血統は争へないものね、婚禮をして二年許過つと、段々腐爛はじめて仕様がなかつたのよ、厭ですことね、なぞいひて白眼に妾を凝視むるときは、袖を拂ひて逃げむかとも思ふなり。

迭に獨斷の道理の城を築きて其に割據すれば、接戦はじまらずして、しかも風波穏かなる日はあるべからず。一時は冷えたりし縁談此頃復燃えいで、九月の下旬、殘暑辛々消うせて人の息づく時分、室田の促すまゝに總ての手順を了して婚姻は結ばれたり。

お禮が夫と侍づくべき人は姓は白井、名は謙吉とて、去る醫學校を卒業して免狀をも有てる人なり。穏居所は十日許の後、建築をはじめ一ヶ月か程に落成し、間に長き廊下を造りて交通自在ならしめ、折々は黙齋も婿の留守には聽骨器を取り、或は醫術論をも戯諭を教えるともありしが、此の夏の暑氣に肺脳痛く衰へ、精根弱くなりしためにや、怖かりし眼の光曇みて、頬の肉恐しく落ちたり。お横は新らしき赤木の家主に、舊は傭女のと思はれむとの口惜しかりしにや、力めて鷹揚なる風姿を粧ひ、お禮への快からぬとも胸に疊みて、眞實の母らしき待遇、上手なりしが、周旋せし室田も家内風波の因ならむとを虞れて口外せざりき。

其後一年餘の星霜を経て、默齋は朽木の如く死しが、赤木が家は如何なりしか、或人は謂へらく、お横と謙吉との際には明白には言兼ねる程の所行ありて、お禮に酷く、資財は次第に減損して門戸傾きはじめしより、お禮は狂氣となりて家出したるまゝ行方を知らずといひ、或はお横は分配してもらひたる、資財を提げて己が生地

に歸りしともいふ。
三年の星霜を経たる秋の中頃、二十歳許の風采秀麗なる紳士、赤木が家を訪れたる時分は、門札すでに更りて、見越の枯柳、丈のみ徒に伸びたるが、雨にそぼてる門柱を叩くあるのみなりき。

(完)



松居松葉

『大洪水』一篇、佛國寫實小説派の泰斗エミル・ゾラ氏壯年時代の作にかゝる、怒濤狂瀾殘虐を擅ま、にして人類を苦しむの慘状を描き出して至らざる所なく盡さる所なし、然かも今回之三陸海嘯の慘澹たるに較ぶれば一粒の砂を採つて須彌に比するに似たり、人工終に自然の力に及ぶ能はざるもの美術の世界に於ても又た爾りとなすか、譯し去つて私かに撫然。

六月初五江の島の客舎陰雨濛々たる處に於て怒濤の聲を聞きつゝ。

(二)

私の名はルイ、ルー・ボーといつて、年は七十二になるがその生れた處は、トルースから二三里隔つたガローヌ

河の片畔、セント・ジョリイといふ村である。四十年の其間はこの瘠地から收穫を見よふとて一生懸命に働いたが、富裕と安樂といふものは一番最後に遣つて来て、この近邊での第一の富豪家となつたのは、やうへこ

の一月ばかり前のことであつた。
我家の家政は殊に都合よく、するとなすと甘く行かぬとてはなかつた。太陽はわしらが朋友になつて下すつて、此少でも收納が悪いなど苦にした事はない、この幸福な時代にわが百姓家に住まつて居た人數は殆んど一ダースばかりで、まづ第一に丈夫で健康で一生懸命に働くわたし。わたしよりはぐつと弱年で、以前は良人に死別れてから私の處へ轉げ込んだ、活潑で御人よしでその笑ひ聲が村の極端まで聞えるといふ妹のアガス。その次ぎは若い連中で息子のアントニーに嫁のローズ。それにエイメー、ベロニッタ、メリード、三人の娘達。其一番目は勇壯でしかも好男子のシイブレン、ボアッソン、ボアッソンの娘付き、其仲に二人の子が出来て、一人は二才、又一人は漸々十ヶ月にしかならなかつた。一番目のはガスパルド、ラブトーの許嫁、三番目のはまた本當の小兒ではあるが、誰が見ても都生れであるかと思ふほど、奇麗に垢ぬけのした子であつた。以上の人

数が則ち我が家を組立て、居たので、私はたゞに祖父であるのみならず曾祖父であつたのだ。この人數が一同食卓につく時にはわたしは右の方には妹、左の方には弟を坐らせた。小兒共はまた年配の順序で、今では既や普通にストーブを吸ふはせになつた十ヶ月の孩兒まで段々下りに頭の列を正して、輪を作つて坐つたが、さて食匙の皿にあたるその物音の囂しさ。それもこれも喋舌るやら笑ふやら、小供どもがこのやうに手を伸すのを見たり。

『祖父さん、あたし達にパンを頂戴ナ、その大きくなつていいのをね、祖父さん』など、騒ぐのを聞えたりした姓家の各室は忙がしい人々の小唄で鳴りもどりめず、その時のわたしの得意と恬悦とは、あゝ如何であつたらう。

あゝ、さても何たる幸福な時節であつたらう！この百夜になるとビールが種々な遊戯を工夫したり、自分が戦争に出て居た頃の譯を語つて聞かせたり、日曜日毎